

市原市天羽田稻荷山遺跡 袖ヶ浦市天羽田稻荷山遺跡

—主要地方道千葉鴨川線埋蔵文化財調査報告書4—

平成12年3月

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

あ も う だ い な り や ま

市原市天羽田稻荷山遺跡 袖ヶ浦市天羽田稻荷山遺跡

－主要地方道千葉鴨川線埋蔵文化財調査報告書 4－



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第380集として、千葉県土木部の主要地方道千葉鴨川線道路改良工事に伴って実施した市原市及び袖ヶ浦市天羽田稻荷山遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、通称鎌倉街道が調査され、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成12年3月31日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 中村好成

凡　　例

- 1 本書は、千葉県土木部による主要地方道千葉鴨川線改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県市原市天羽田字稻荷山348-5他（遺跡コード 219-078）、袖ヶ浦市上泉字西荻原171他（遺跡コード 229-025）に所在する天羽田稻荷山遺跡である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は、第1章に記載した。
- 5 本書の執筆は、主任研究員 相京邦彦が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部市原土木事務所、市原市教育委員会、袖ヶ浦市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行	1/50,000 地形図「鮫崎」	(NI-54-19-16)
第2図 国土地理院発行	1/25,000 地形図「鮫崎」	(NI-54-19-16-3)
	1/25,000 地形図「上総横田」	(NI-54-19-16-4)
- 8 第3図 袖ヶ浦市役所発行 1/2,500 地形図 No20・27を改図転載
- 9 周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年に撮影のものを使用した。
- 10 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
第2節 遺跡の位置と環境.....	2
第3節 調査の方法.....	5
第2章 繩文時代.....	8
第1節 遺構.....	8
第2節 遺物.....	8
第3章 中・近世.....	11
第1節 遺構.....	11
第2節 遺物.....	13
第4章 まとめ.....	22
第1節 繩文時代.....	22
第2節 中・近世.....	22
報告書抄録.....	卷末

挿図目次

第1図 遺跡の位置図.....	1	第9図 遺物実測図（1）.....	9
第2図 周辺の遺跡分布図.....	3	第10図 遺物実測図（2）.....	14
第3図 遺跡周辺の地形図.....	4	第11図 遺構平面図（1）・土層断面図	15
第4図 調査グリッドと下層確認グリッド配置図	5	第12図 遺構平面図（2）・土層断面図	16
第5図 表土層出土の旧石器.....	5	第13図 遺構平面図（3）・土層断面図	17
第6図 遺構配置図.....	6	第14図 遺構平面図（4）・土層断面図	18
第7図 西側調査区平面図・土層断面図.....	7	第15図 調査区土層断面図.....	19
第8図 繩文時代の遺構	8	第16図 軸平面図、土層断面図.....	20
SF001（炉穴）・SK001（陷穴）	8	第17図 硬化範囲平面図、硬化面下波板状凹凸 平面図.....	21

表目次

第1表 周辺遺跡一覧.....	2	第2表 錢貨計測表.....	14
-----------------	---	----------------	----

図版目次

- | | | |
|------|--------------|------------------|
| 図版 1 | 遺跡周辺航空写真 | 2 調査区近景（轍跡検出状況） |
| 図版 2 | 1 調査区写真（東から） | 3 調査区土層断面図 |
| | 2 調査区写真（西から） | 図版 5 1 波板状凹凸 |
| 図版 3 | 1 調査前全景（東から） | 2 西側調査区全景 |
| | 2 調査区近景（1） | 3 SK001（陥穴）全景 |
| | 3 調査区近景（2） | 図版 6 出土遺物（1）・（2） |
| 図版 4 | 1 調査区近景（3） | |

第1章 はじめに

第1節 調査の概要（第1図）

千葉県では館山自動車道及び東京湾横断道路（アクアライン）等の建設に伴う周辺交通網の整備のため、接続道路の一つである主要地方道千葉鴨川線の道路改良事業を計画した。主要地方道千葉鴨川線は、館山自動車道と外房方面とを結ぶ主要な幹線道路で、将来的にも交通量の増加が見込まれる。この道路改良工事に当たり、千葉県土木部道路建設課は、千葉県教育委員会に対し、事業予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱い」の照会を提出した。これに対して千葉県教育委員会から、事業地内に遺跡が所在する旨の回答が出され、遺跡の取り扱いについて、千葉県教育委員会と千葉県土木部との間で協議が重ねられ、発掘による記録保存の措置を講ずることで協議が整った。

調査は財団法人千葉県文化財センターが実施することになり、千葉県との委託契約を締結し、平成11年4月1日から、同年6月15日まで実施し、その後、遺物の水洗・注記から始まり、図面の整理、遺物の復原、実測、挿図・図版作成等の作業を進め、平成11年7月末に原稿執筆を行い、報告書の刊行となった。

期 間	発 挖	平成11年4月1日～平成11年6月15日
	整 理	平成11年6月16日～平成11年7月31日
組 織	調査部長	沼澤 豊、南部調査事務所長 高田 博
	担当職員	主任研究員 相京 邦彦
内 容	発掘調査	本調査 上層 1,957m ² 確認調査 下層 102m ²



第1図 遺跡の位置図 (1 : 50,000)

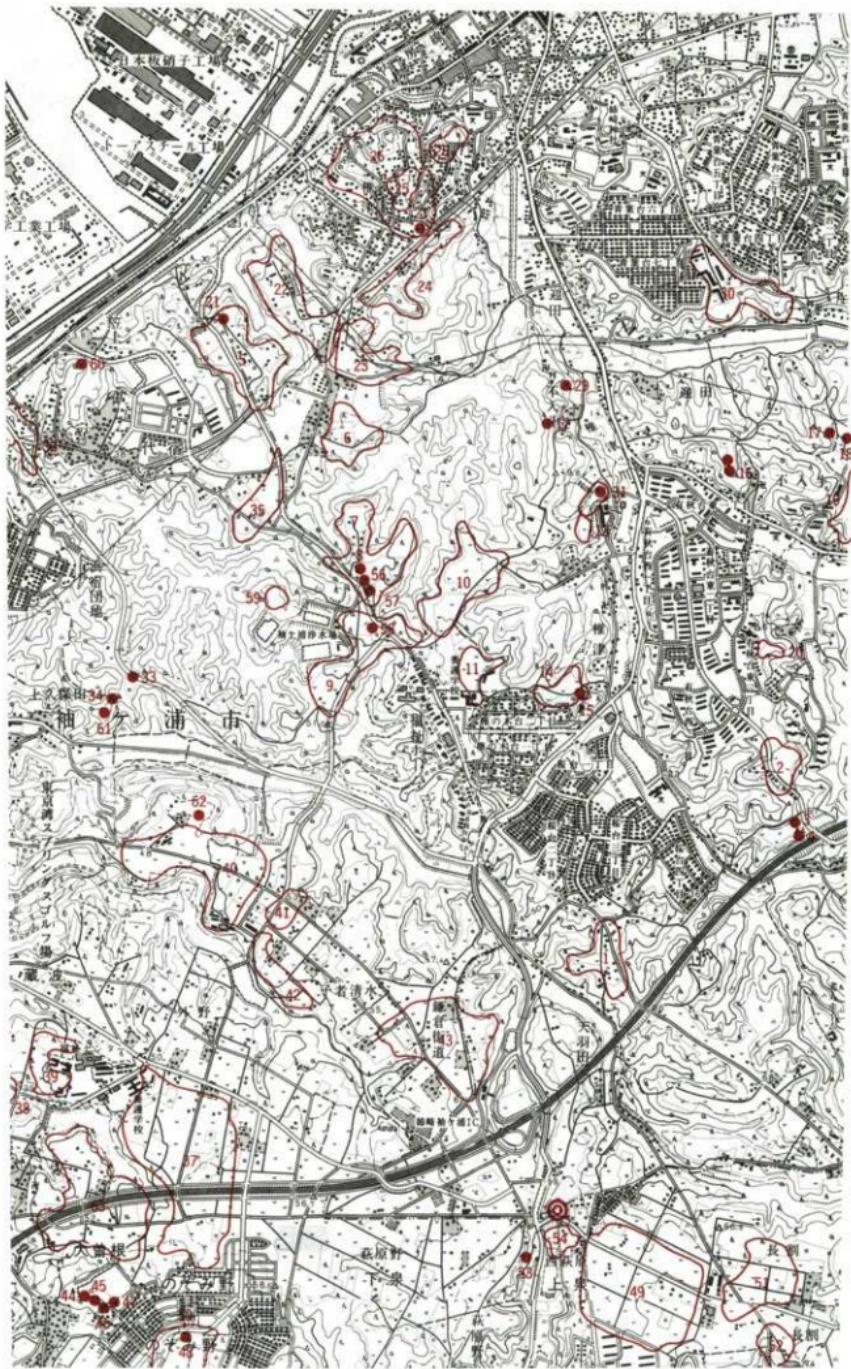
第2節 遺跡の位置と環境（第2・3図、第1表、図版1）

天羽田稻荷山遺跡は、小櫃川の沖積地を南に望む台地上に立地する。標高約65mのこの台地は小櫃川と養老川の分水嶺上にあたり、本地域特有の樹枝状に開析された小支谷が発達している。この地域には通称「鎌倉街道」と呼ばれる地名が残っており、古代道路の関係から注目されてきた¹⁾。天羽田稻荷山遺跡は、これらの小支谷を避けた分水嶺上にあり、「鎌倉街道」と呼ばれる現道路下に所在している。

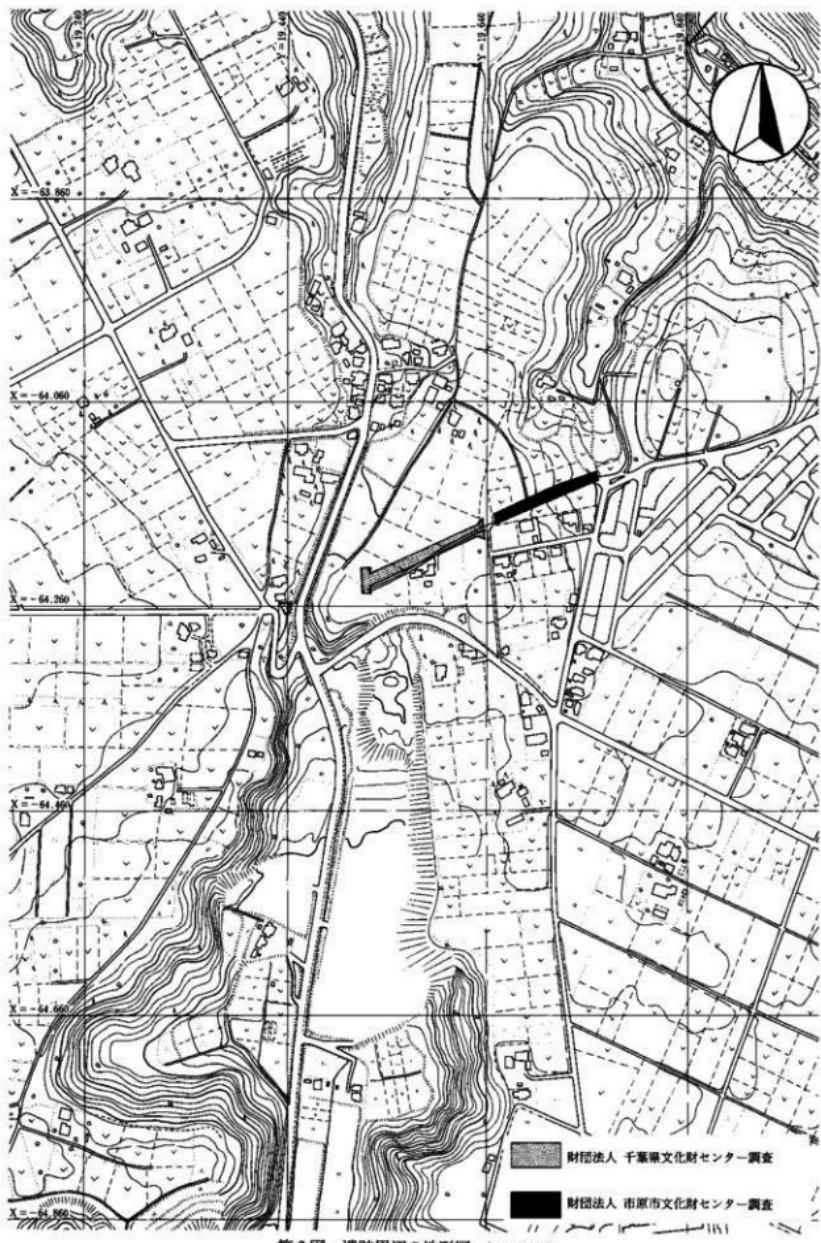
館山自動車道の建設に伴う発掘調査及び周辺の道路改良工事により、多くの道路跡が調査されており、西方約2kmには財団法人千葉県文化財センターが調査を実施した袖ヶ浦市山谷遺跡(63)²⁾があり、道路跡・井戸・掘立柱建築跡等が検出され、平成7・8年には財団法人市原市文化財センターが同一道路の東方で道路跡の調査を実施した³⁾。市原市域では天羽田坂ノ上遺跡(1)、中林遺跡(7)、上椎木遺跡(9)、椎津堰谷遺跡(22)、袖ヶ浦市域では野田鎌倉街道(39)、鎌倉街道B(41)、子者清水遺跡(42)、鎌倉街道C(43)、七人堀込遺跡⁴⁾、境No.2遺跡⁵⁾がある。第2図は、千葉県埋蔵文化財分布地図を基に、奈良・平安時代から中・近世の遺跡を抽出したものであるが、これらの遺跡の多くが通称「鎌倉街道」と呼ばれる道路沿いにあり、古くからの道路が現在でも使用されていることが窺われる。

第1表 周辺遺跡一覧（「千葉県埋蔵文化財分布地図」奈良時代～近世）

遺跡番号	遺跡分布図		遺跡分布図				
	遺跡名	時代	種別	遺跡番号	遺跡名	時代	種別
◎ 1 天羽田稻荷山	中近世ほか		道路跡	32	久保田城	中近世	城跡
1 天羽田坂ノ上	奈良・平安		鎌倉街道	33	上大城第1号塚	中近世	塚
2 元居原	奈良・平安		包蔵地	34	上大城第2号塚	中近世	塚
3 ヤジ山塚群(200-2)	近世		塚	35	陣場	奈良・平安	包蔵地
4 ヤジ山(200-1)	近世		塚	36	清水川台	奈良・平安	集落跡
5 椎津中台	平安		包蔵地	37	台山	平安	包蔵地
6 念切台	奈良・平安		包蔵地	38	秋葉ノ台	平安	包蔵地
7 中林	中近世		道路跡	39	野田鎌倉街道	平安	鎌倉街道
8 椎津旧三山塚	近世		塚	40	京庭山B	奈良・平安	集落
9 上椎木	平安、中近世		道路跡	41	鎌倉街道B	中近世	鎌倉街道
10 代地	奈良・平安		包蔵地	42	子者清水	中近世	鎌倉街道
11 椎津新林	奈良・平安		包蔵地	43	鎌倉街道C	中近世	鎌倉街道
12 水源城	中世・戰国		城館跡	44	墓山第1号塚	中近世	塚
13 不入斗堀ノ木	奈良・平安		生産跡	45	墓山第2号塚	中近世	塚
14 上野別当	奈良・平安		包蔵地	46	墓山第3号塚	中近世	塚
15 上野別当三山塚	近世		塚	47	墓山第4号塚	中近世	塚
16 上持長塚群	近世		塚	48	大堀台	平安	包蔵地
17 迎田旧三山塚	近世		塚	49	東萩原	奈良・平安	包蔵地
18 迎田三山塚	近世		塚	50	熊切山塚	中近世	塚
19 不入斗遺跡群	奈良・平安		集落跡	51	山宮I	奈良・平安	包蔵地
20 上スダレ	奈良・平安		包蔵地	52	影山4	奈良・平安	包蔵地
21 下中台貝塚	奈良・平安		貝塚・集落	53	西萩原塚	中近世	塚
22 椎津堰谷	奈良・平安、中近世		道路跡	54	西萩原	奈良・平安	包蔵地
23 椎津松山	奈良・平安		包蔵地	55	二又	奈良・平安	包蔵地
24 島原	奈良・平安		包蔵地	56	清水川台第1号塚	中近世	塚
25 五重台	奈良・平安、中近世		集落跡	57	清水川台第2号塚	中近世	塚
26 尾崎	奈良・平安、中近世		集落跡	58	清水川台第3号塚	中近世	塚
27 椎津合貝塚	奈良・平安		集落跡	59	定俠山	奈良・平安	包蔵地
28 茶ノ木	奈良・平安		集落跡	60	愛宕塚	中近世	塚
29 不入斗堀ノ内三山塚	近世		塚	61	上大城第3号塚	中近世	塚
30 六孫王原	中世		集落跡	62	須田連塚	中近世	塚
31 百枚田若跡	中世		城館跡	63	山谷	奈良・平安	鎌倉街道



第2図 周辺の遺跡分布図 (1:25,000)



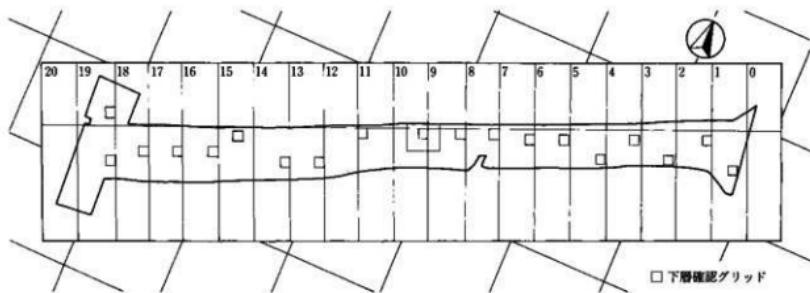
第3図 遺跡周辺の地形図 (1 : 5,000)

第3節 調査の方法 (第4・6・7図)

調査地は、現在の千葉鴨川線に新たに架ける高架橋の橋脚部分と、取り付け道路部分の調査で、千葉鴨川線を挟んで東側調査区と西側調査区の2か所に分かれている。東側調査区は、現在使用している生活道路を中心として幅約10m、長さ約130mで、道路中央が市原市（市原郡）と袖ヶ浦市（君津郡）の市（郡）境となっている。東側調査区の西端は改良工事に伴う高架橋の橋脚建設のため、横に広くなっている。東側調査区の現道は生活道路で、道に沿って農地があり、常に通路を確保する必要があり、そのため道路の長軸に対して左右を別々に調査することとなった。

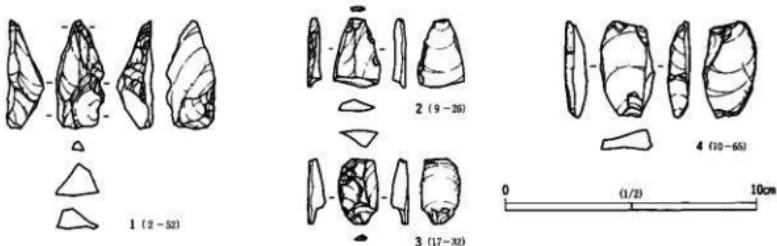
公共座標と路線主軸とは約30度のずれがあり、公共座標に沿ったグリッドを設定しての調査はできなかつたため、7m×10mのグリッドを設定し、調査を開始し、後に公共座標に対応できる方法（第4図）をとった。東端から0区、1区…西端を20区とし、7mおきに土層観察用の土層ベルトを設定した。西側調査区は、東側を現在の千葉鴨川線に、西側を現道に挟まれた約107m²の狭い範囲のため、2m×6mのトレンチを設定し、遺構・遺物の有無の調査を実施した。

上層の調査終了後、下層の確認調査を実施したが、遺物は確認されず、調査を終了した。



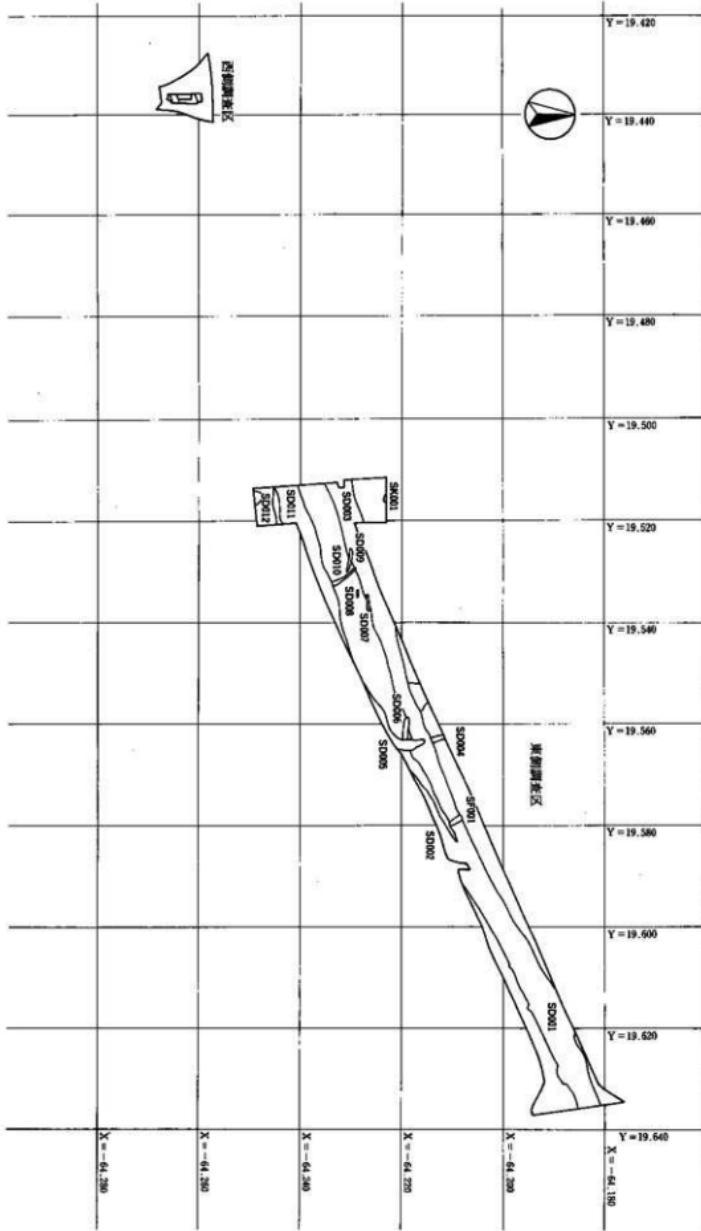
第4図 調査グリッドと下層確認グリッド配置図 (1:1,000)

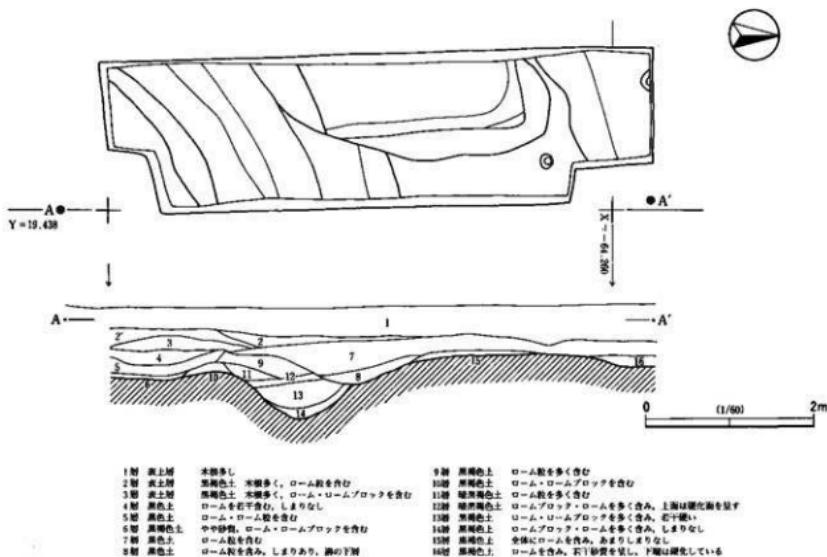
なお、上層の調査中に表土より旧石器が出土したため、ここに図示しておく（第5図）。1(2区-52)・2(9区-26)は安山岩製、3(17区-32)は黒曜石製のいずれもナイフ形石器で、4(10区-65)は安山岩製の楔形石器である。



第5図 表土層出土の旧石器

(000' 1 : 1) 図 9 第 速標位置図





第7図 西側調査区平面図・土層断面図

- 注1 小熊吉蔵「西上総における古街道と国府都家所在地の関係」史跡名勝天然記念物第7集 1932
 小熊吉蔵「鎌倉街道」史跡名勝天然記念物第10集 1933
 小熊吉蔵「千葉県に於ける王朝時代の郡家の遺跡」史跡名勝天然記念物第12集 1935
 須田 勉「川原井寺と古代東海道」南總郷土文化研究会誌第11号 南總郷土文化研究会 1978
 大谷弘幸「西上総地域の古道跡」研究連絡誌第41号 1994
- 2 柴田龍司「鎌倉道と市一袖ヶ浦市山谷遺跡の成果から」研究連絡誌第41号 1994
 柴田龍司ほか「特集 小櫃川地域の中世遺跡」研究連絡誌第37号 1993
 柴田龍司「西上総の中世道路跡ー袖ヶ浦市山谷遺跡の事例を中心にー」中世のみちと物流 山川出版社 1999
- 3 桜井淳史「天羽田稻荷山遺跡」市原市文化財センター年報 平成七年度 市原市文化財センター 1998
- 4 諸墨和義「七人堀込遺跡」君津都市文化財センター 1992
- 5 牛房茂行「境No.2遺跡」君津都市文化財センター 1985

第2章 繩文時代

第1節 遺構 (第6・8・14図、図版5)

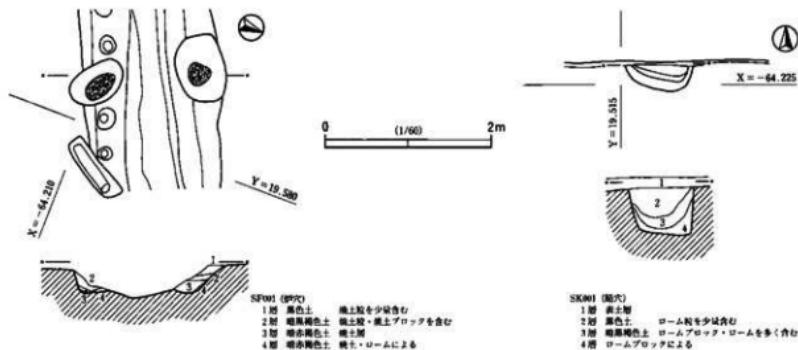
検出された遺構は繩文時代早期の炉穴(SF)と陥穴(SK)の2基のみであったが、後世の遺構覆土内や周辺の烟には同時期と考えられる多くの礫の散布がみられる。

SF001(炉穴)(第6・8図)

炉床部が2か所検出された。SD001によって中央部を切られているが同一遺構と思われSF001とした。残存長1.9m、幅は0.8m、0.45mである。炉床はそれぞれ0.4m×0.2m、0.3m×0.25mである。覆土中から繩文土器の小破片が出土したが、図示はできなかった。

SK001(陥穴)(第6・8図、図版5)

SK001は東側調査区の西端にあり北側の半分が調査区外へ続き、全体は調査できなかった。形状や覆土から繩文時代早期の陥穴と思われる。検出された範囲の残存長は0.85m、残存幅は0.35m、深さは約0.55mである。覆土からは繩文土器の小破片が出土したが、図示はできなかった。



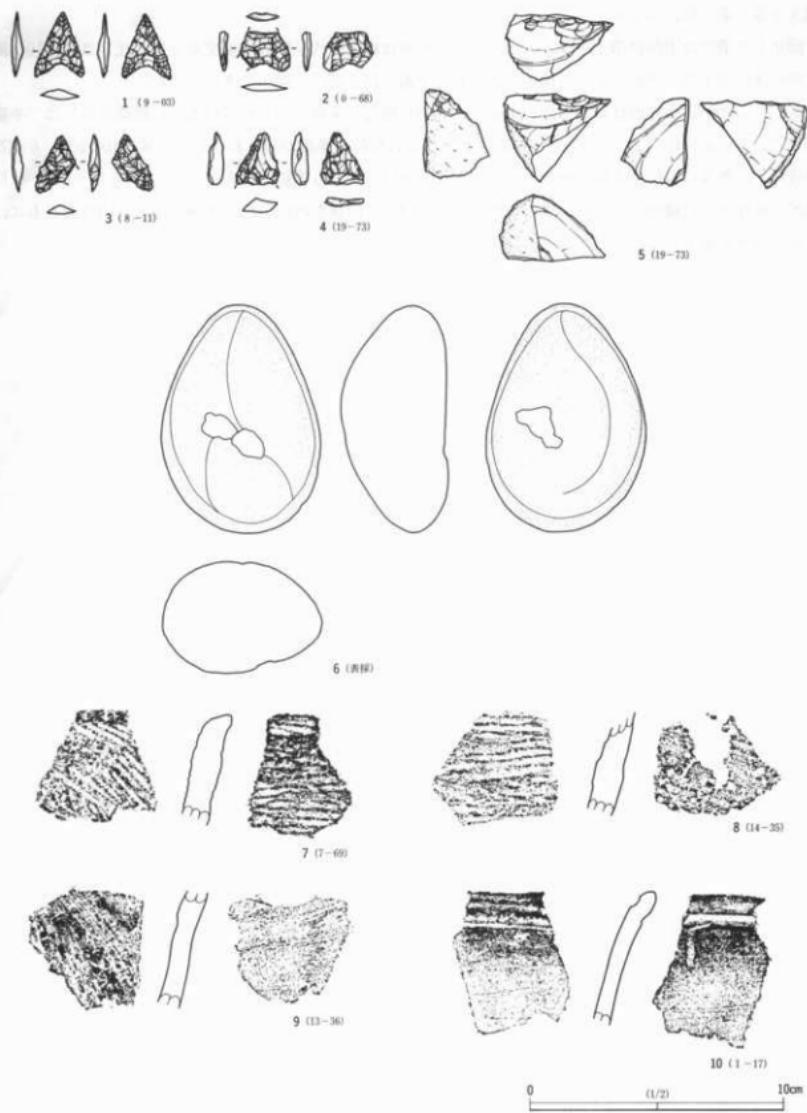
第8図 繩文時代の遺構 SF001(炉穴)・SK001(陥穴)

第2節 遺物 (第9図、図版6)

石器 (第9図、図版6)

石器4点、石核1点、磨石1点を図示した。調査区内からは多量の礫が出土している。周辺の烟地にも礫の散布が見られる。図示した石器は、表採および道路跡の覆土中からの出土で、繩文時代の遺構からの出土ではない。

1(9区-03)はチャート製の石器で、完形品である。2(0区-68)・3(8区-11)・4(19区-73)は黒曜石製の石器で、欠損品である。5(19区-73)は安山岩製の石核であり、一部に礫面を残している。6(表採)は硬砂岩製の円礫を使用した磨石である。側面の周囲に磨痕がみられ、表裏面に敲打に伴う剝離がみられる。



第9図 遺物実測図（1）

縄文土器（第9図、図版6）

図示した遺物は道路跡覆土中からの出土で、7～9は縄文時代早期の条痕文系土器に比定され、10は縄文時代後期の土器と思われる。遺構から出土した土器片は小破片で図示できなかった。

7(7区-069)の外面は斜め方向の条痕を、内面は横位の条痕が施されている。口唇部は外方にやや肥厚している。8(14区-035)は胴部の破片で、外面には横位の条痕が施されている。9(13区-036)も胴部の破片で、外面は斜位の条痕が施されている。8～9はいずれも纖維を含んでいる。10(1区-017)は口縁部の破片で、口縁部外面下には浅い沈線が巡り、同じく口縁部内面下には沈線が巡る。内外面ともに、入念な磨きが施されている。

第3章 中・近世

第1節 遺構（第6・11～17図、図版2～4）

現道の下から道路跡が検出調査された。道路跡は数次にわたる修繕・改築を受けており、複雑に重複していた。各期の道路跡ごとに遺構番号を付けることは不可能で、重複しているものについては同一遺構番号（SD）とした。また、単独に見られる枝道と思われる道路跡には別に遺構番号を付けた。

調査は、建設予定の道路幅が約10mであるため、道路の長軸を基準として調査を進めた。道路跡は上端幅約5m、道路内の通路と思われる硬化面の幅は0.8m前後と確認できた。硬化面は修繕・改築や耕作などによって攪乱を受けており、同一期における硬化面全面が遺存していなかった。硬化面の下面には、他の遺跡の調査例と同様に波板状凹凸¹⁾が見られた。道路跡は台地の平坦面では緩やかに蛇行している。たびたび修繕・改築を行っており、多いところでは6面（第11図、SP1）の硬化面（道路通路面）が検出された。道路跡の平面図は、長さ約130mにもなるため、4図に分けて図示した。調査区の東方約10mまでを、平成7・8年に財團法人市原市文化財センターが調査を実施し²⁾、道路跡を検出している。

SD001（第6・11・12図）

今回の調査で最も東側の区で調査された道路跡をSD001とした。調査は、平面的に遺構の検出をおこなった。数条の道路跡が重複しており、各道路跡には底面に小ピットが確認された。この小ピットは、他の道路跡でも確認されている。道路跡は数次にわたる修繕・改築を受けており、道路跡覆土中に6面の硬化面を検出した。道路跡検出面の上端幅は約5m、深さは約0.5mであった。中世輸入銭が1枚出土したが、他に図示できる遺物の出土はなかった。

SD002（第6・12図）

SD001は調査区中央でSD003と左右に分岐する。道路構築当初はSD003へ続き、改修によってSD002に道路が変更になったものと思われる。SD001はそのままSD002に続くが、民家の下に延び調査区外に続き、東側調査区の西端でSD011として検出される。SD001・SD003・SD011は一本の道路として使用されていた時期があったと思われる。

SD003（第6・13・14図）

SD001が調査区の中央部で左右に分岐したところから、西側をSD003と呼称した。SD003は、西側に行くに従って地形に沿って徐々に傾斜し、最西端では現地表から約1.5mの深さになる。SD003も数次にわたる修繕・改築を受けている。道路跡覆土中には数面の硬化面が確認できた。硬化面の下面には波板状凹凸が見られる（第17図右）。この凹凸の覆土には直上の土層と同様な土が硬く締まった状態で充塞されており、この凹凸が道路構築上の何らかの意味を持っていると推定される。遺物は覆土中から中世輸入銭が1枚出土したのみで、土器片の出土はなかった。

SD004（第6・13図）

SD004は、SD005と接する位置で検出されたが、掘込みの深さに差があり、別の遺構と思われる。覆土中には硬化面ではなく、底面は硬く締まっていない。SD005とSD003に入る枝道の可能性があるが、枝道とは明確には断定出来ない。遺物の出土はなかった。

SD005 (第6・13図)

SD005は、SD003と一部重複して検出された。掘込みはSD003よりも深く、あたかもSD001から続いていた道路からSD001又はSD011に続く枝道の様にも観察される。SD005は調査区の壁に沿って曲がり、SD011につながる様に観察されるが、調査区外のため確認出来なかった。遺物の出土はなかった。

SD006 (第6・13・17図)

SD006はSD003に入る枝道と思われる。第17図左でわかるように、SD006がSD003の覆土に入ると、そのまま硬化面が続く。そのためSD006は、SD003の覆土中から検出された硬化面をもつ道と、本来同一の道路跡であることが推定できる。また、第17図右に図示した様な波板状凹凸ピットがこの硬化面の下からも検出されている。

SD007 (第6・14図)

SD007は、SD003に入る枝道と思われる。SD003の覆土中から検出された硬化面に続くものと思われる。底面には小ピットがみられる。

SD008 (第6・14図)

SD008も、SD007と同様にSD003に入る枝道と推定される。底面には、波板状凹凸と小ピットがある。

SD009 (第6・14図)

SD009もSD003につながる枝道と推定される。波板状凹凸と同様の小ピットが底面から検出されている。

SD010 (第6・14図)

SD010は、SD003とSD011を結ぶ位置で検出されたが、SD011の通路面とは約1mの比高差があり、SD003に入る枝道と推定される。SD009と同様に底面に小ピットがある。このことから、SD007、SD008、SD009とは改修によって位置が変わったSD003の枝道と思われる。

SD011 (第6・14・16図)

最西端から検出された。道路跡は全体に西方に行くにつれて地形に沿って傾斜し、通路部分と思われる面までは、現地表面から約1.8mもある。硬化面から歴痕が検出された(第16図)。SD001と同一道路と思われるが、台地上では歴痕は検出されなかった。通路と思われる硬化面の幅は狭く、車による通行がSD011で行われていたかは不明である。また、SD003とあたかも通行部を挟む両溝のごとく見られるが、分岐した同一の道路跡であることは、台地上での調査によって確認されている。

SD012 (第6・14図)

SD011と東側調査区の西端で合流する道路跡である。今回の調査では、SD012はこの範囲でしか検出されなかった。近くにある県道上高根北袖線は、現在は急なカーブを描いて現千葉鶴川道路につながるが、今回調査されたSD012はこの古道と思われる。このSD012からは波板状凹凸は検出されず、構築方法に違いが見受けられる。明治15年の参謀本部陸軍部作成の測量図によると、県道上高根北袖線はSD012よりも若干南側にあり、測量図作成以前の旧道跡と思われる。

第2節 遺物（第10図、図版6）

全て道路跡の覆土中から出土したものであり、土器は全て小破片である。
土器（第10図1～3、図版6）

1は5区の道路跡覆土から出土した渥美窯製の陶器片（5区-012）である。2は7区の道路跡覆土から出土した猿投窯製の灰釉陶器片（7区-059）である。8世纪末から9世纪はじめと推定される。胸部の破片で内側と割れ口を砥石に転用している。3は18区の道路跡覆土から出土した灰釉陶器片（18区-010）である。内面に釉が付着している。9世纪初頭と推定される。

石製品（第10図4・5、図版6）

道路跡覆土中から砥石片が2個体分出土した。4（8区-014・015）は1区からの出土で、3個体に割れ、各面とも使用され摩滅している。5（3区-047）は3区からの出土で、よく使用され、摩滅している。

中世輸入銭（第10図6・7、第11・13図、第2表、図版6）

輸入銭は2点が出土した。2点とも道路跡からの出土で、両者とも道路跡の中で最も北寄りの位置に作られた道路跡から出土した。

銭貨1（第10図6、第11図）

1区の道路跡の覆土中から出土した。完形品である。北宋銭で「至道元寶（しどうげんぽう）」である。至道元寶の銭面書体には真書、行書、草書体があるが、出土した銭貨は草書体である。至道元寶は、至道元年（995年）に鋳造されたものである。

銭貨2（第10図7、第13図）

11区の道路跡の底面から出土した。北宋銭で「紹聖元寶（しょうせいげんぽう）」で、折二銭（2文銭）である。紹聖元年（1094年）に鋳造された。出土例は多い方である。

注1 波板状凹凸については下記の文献がある

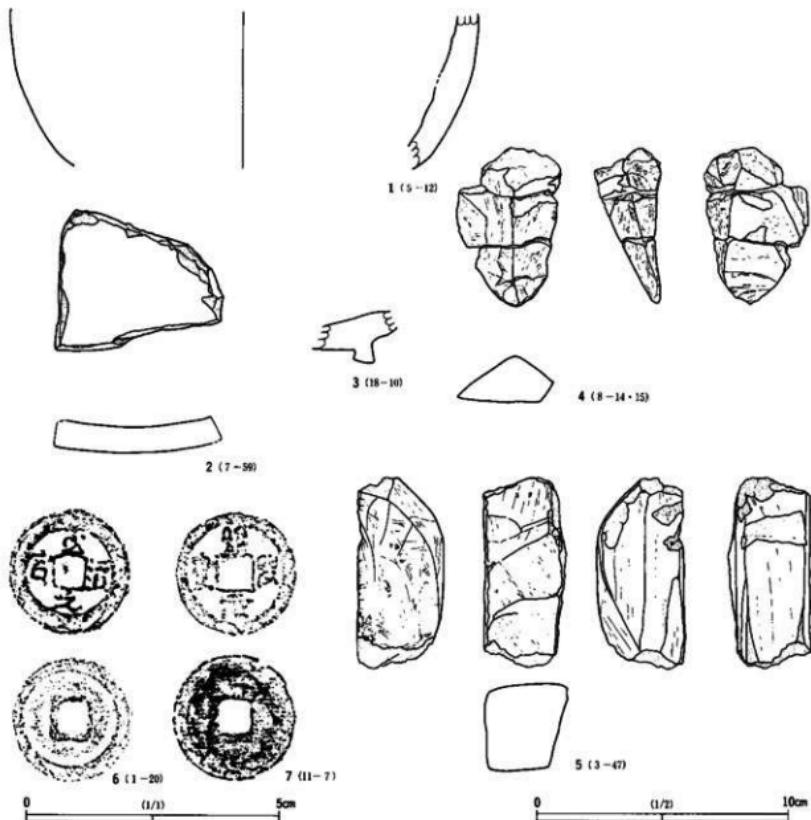
大井町教育委員会「町内遺跡群II」1993

高橋直成「発掘された道」入間東部地区文化財保護連絡協議会 埼玉県入間東部地区の歴史の道 1993

「宮城県遺跡調査成果発表会要旨」 宮城県史跡整備市町村協議会編 1997

竹田幸司「仙台市玉ノ塙遺跡・大野田古墳群・南小泉遺跡の中世道路跡について」中世のみちと物流 山川

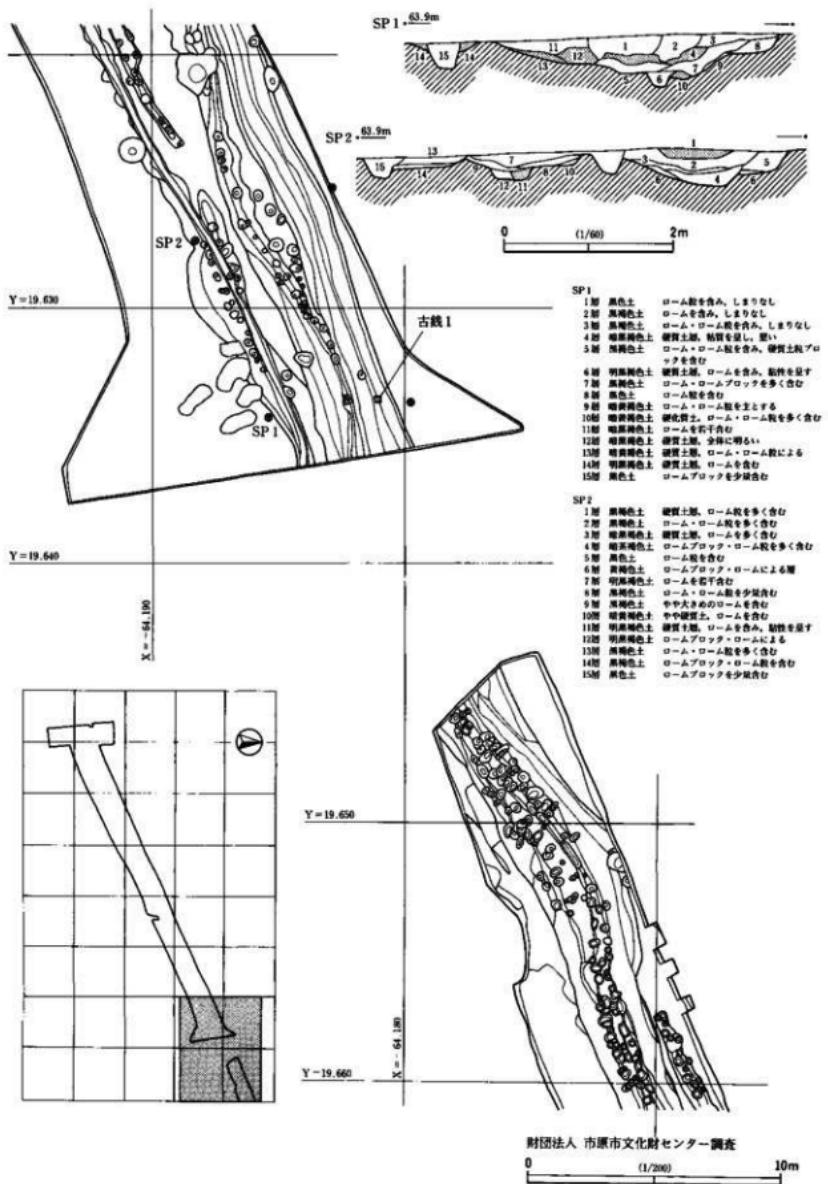
出版 1999



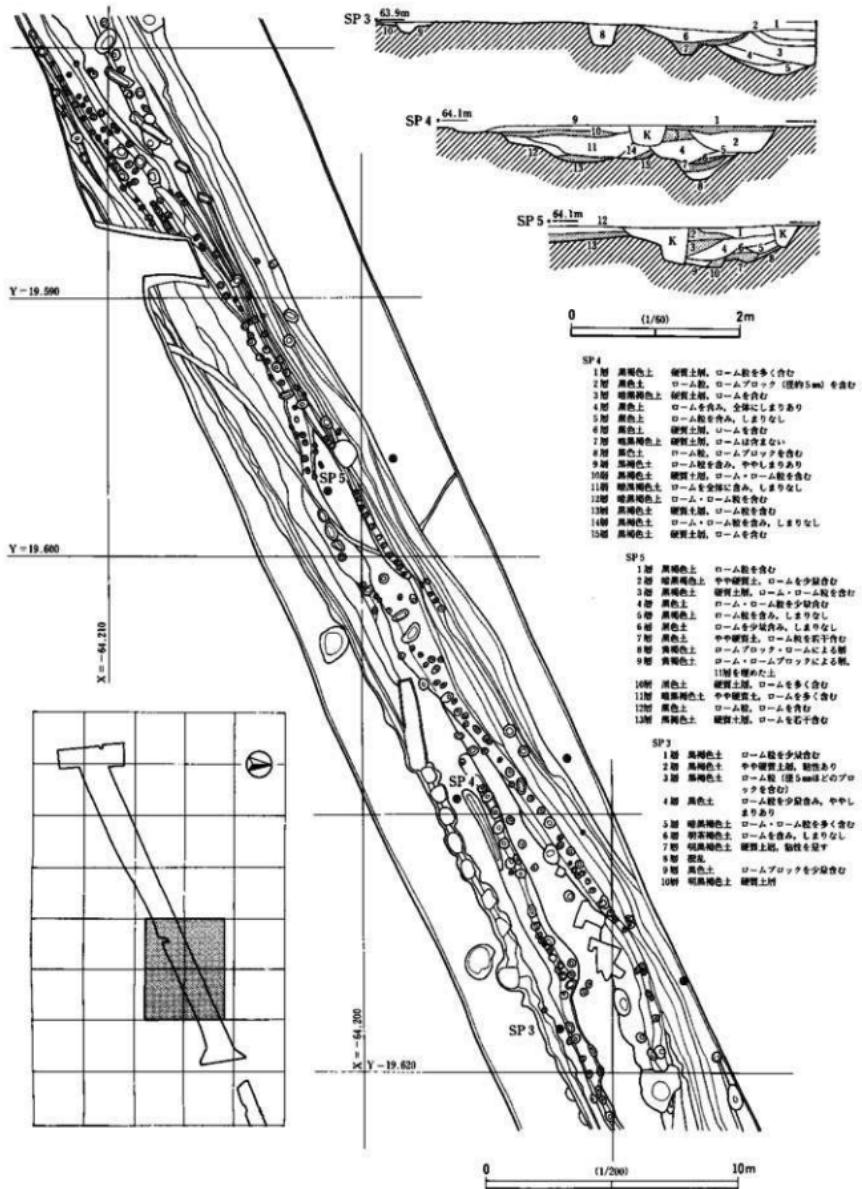
第10図 遺物実測図 (2)

第2表 銭貨計測表

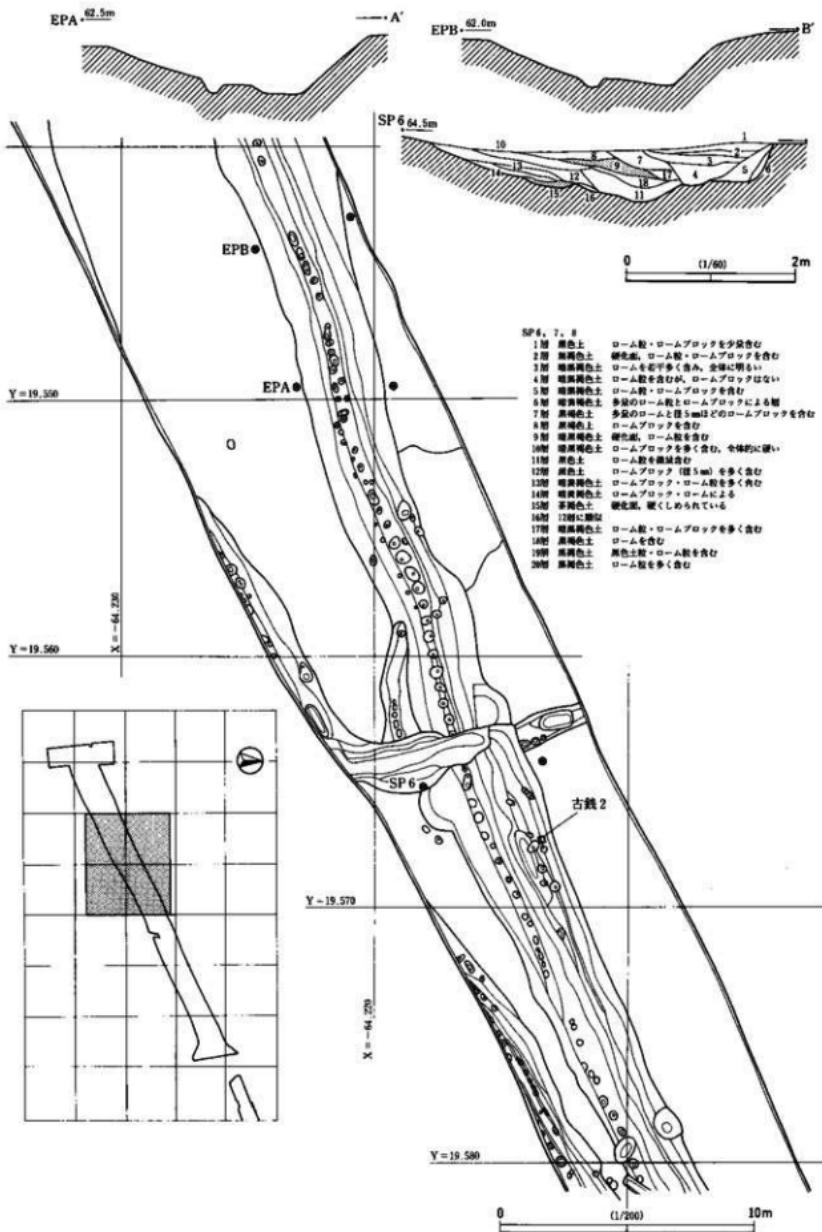
No	辨認番号	造構	錢 横	铸造地	初鑄年	西曆	外縁外径 mm	外縁内径 mm	外縁厚 mm	文字面厚 mm	孔幅 mm	量目 g
1	10-6	1区	至道元寶	北宋	至道元年	995	23.90×24.00	16.88×16.50	1.10~1.12	1.10~1.40	6.00~6.10	2.39
2	10-7	11区	紹聖元寶 (折二錢)	北宋	紹聖元年	1094	24.30×24.32	19.60×19.20	1.00~1.40	1.15~1.20	6.45~6.55	2.08



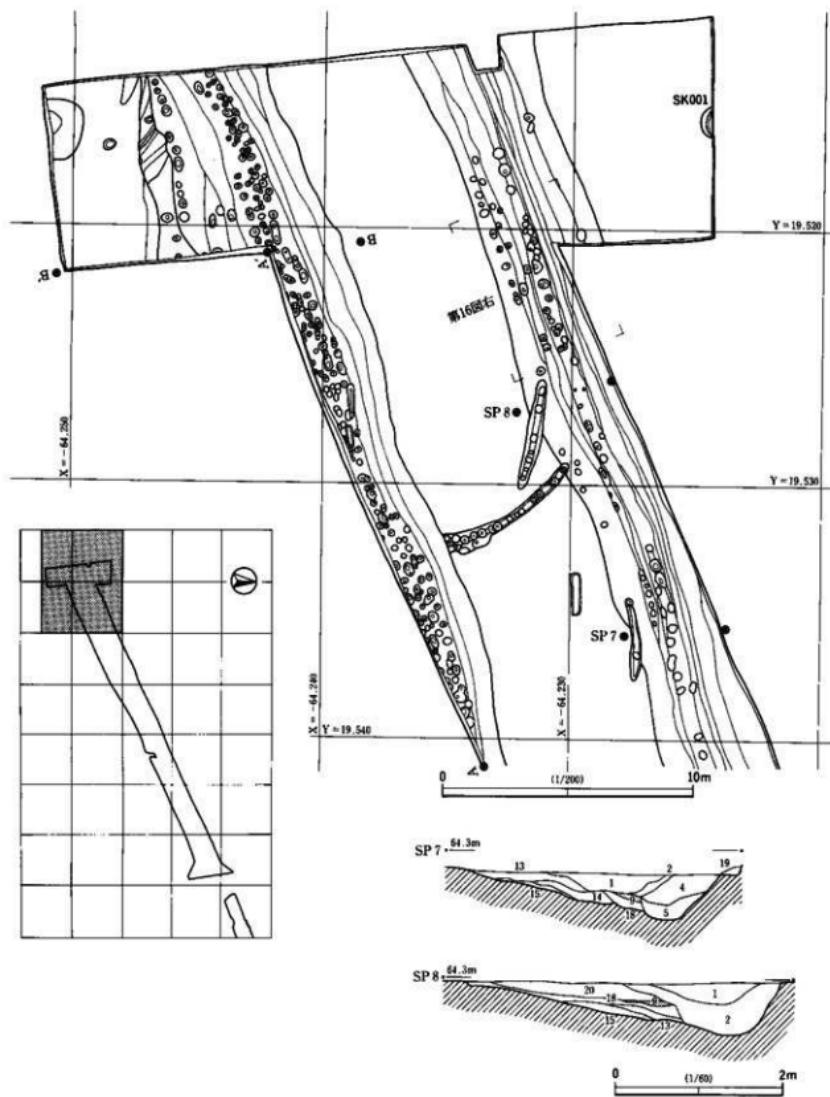
第11図 遺構平面図(1)・土層断面図



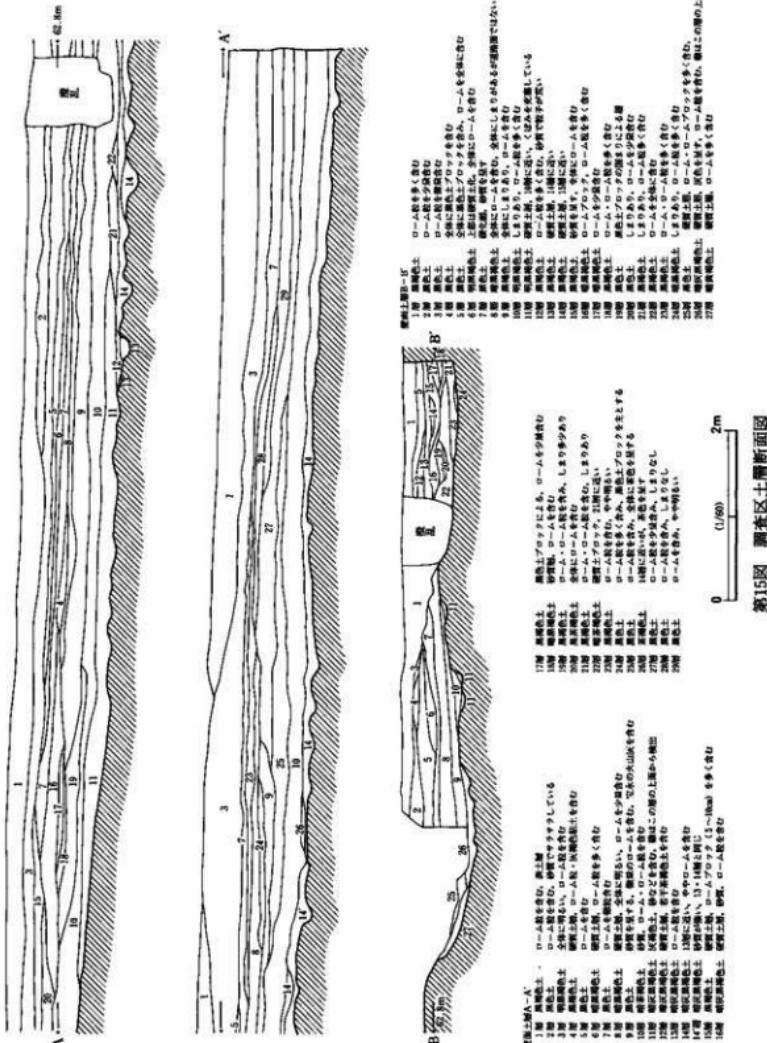
第12図 造構平面図(2)・土層断面図



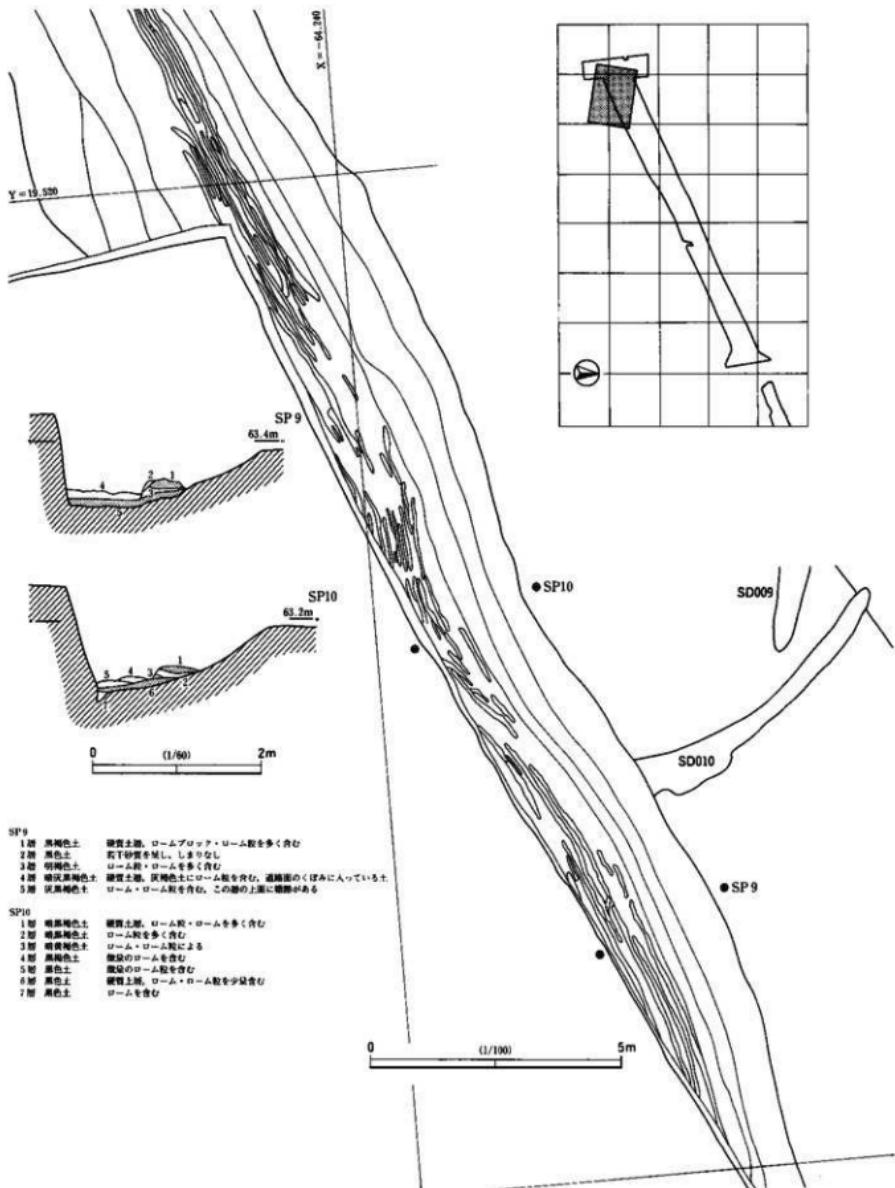
第13図 遺構平面図(3)・土層断面図



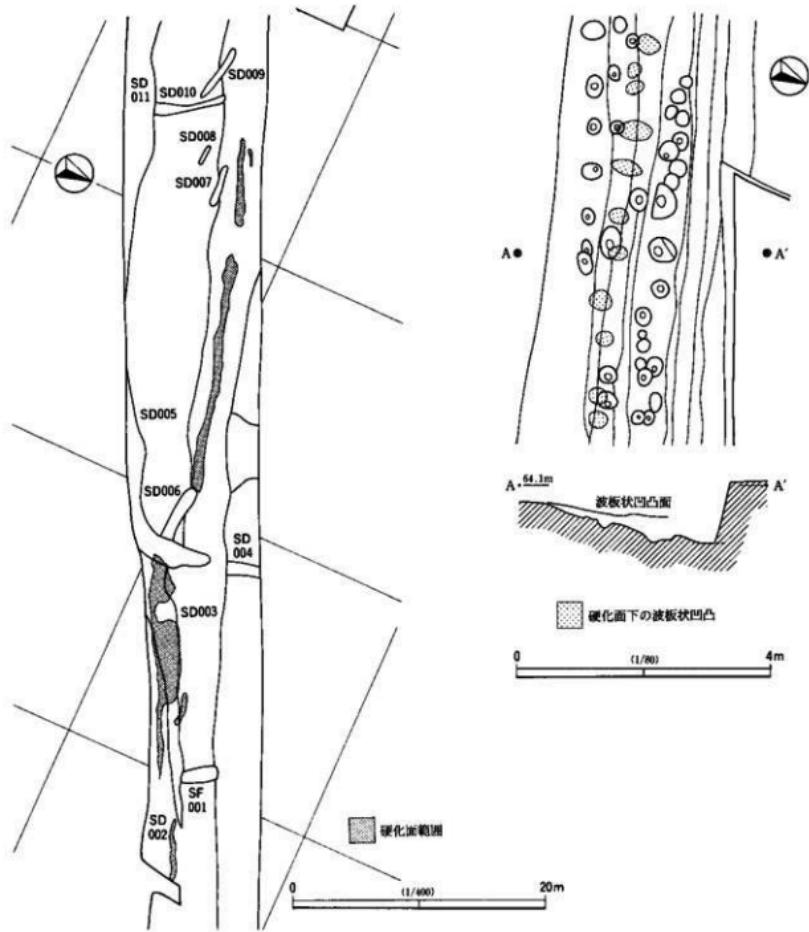
第14図 遺構平面図(4)・土層断面図



第15図 調査区土層断面図



第16図 幢平面図・土層断面図



第17図 硬化範囲平面図・硬化面下波板状凹凸平面図

第4章 まとめ

第1節 繩文時代

縩文時代の遺構としてSF001とSK001の2基が調査された。また、表探及び道路跡覆土中から、条痕文系土器群の出土がみられた。これら土器群は縩文時代早期の茅山下層式～茅山上層式と縩文時代後期の土器に比定されると思われ、全て小破片であった。周辺の畠には礫の散布が見られた。道路跡覆土中からは楔形石器、石鎌の出土が見られることなどから、周辺には縩文時代遺跡の存在が予想される。

第2節 中・近世

天羽田稻荷山遺跡では、道路跡が調査された。近年、通称「鎌倉街道」と呼ばれる古道に関する遺跡の調査が、袖ヶ浦市・市原市を中心とした地域で多く見られる¹⁾。特に館山自動車道建設に伴う発掘調査や周辺の道路改良工事によって、古代から中・近世にかけての多くの道路跡が調査されている。また、「鎌倉街道」を冠する地名が多く残されている。平成4年から財団法人千葉県文化財センターによって調査された山谷遺跡²⁾では、道路跡・井戸・建物跡・墓跡が調査され、道路上に沿った集落の景観が復元された。

本地域の「鎌倉街道」は、下新田・立野ルート、大寺・藏波ルート、天羽田・椎津ルート、立野・姉崎ルート、藏波・長浦ルートの5ルートに整理分類され³⁾、下新田・立野ルートは古東海道と推定されている。天羽田稻荷山遺跡で調査した「鎌倉街道」は、このうちの下新田・立野ルートに該当している。「鎌倉街道」と呼ばれる遺跡は、袖ヶ浦市野田鎌倉街道遺跡(39)、鎌倉街道B遺跡(41)、鎌倉街道C遺跡(43)、子者清水遺跡(42)、山谷遺跡(63)、市原市天羽田坂ノ上遺跡(1)、中林遺跡(7)、椎津堀谷遺跡(22)などがある。これらの遺跡の多くは、通称「鎌倉街道」や、今回調査を実施した天羽田稻荷山遺跡の西側で分岐した枝道に所在している。

検出された道路跡は、第11図のSP1・2の断面図から推定すると上幅約5mにもなる。通路面と推定される範囲は硬く締まり硬化面となっている。硬化面の幅は0.5m前後であるが、調査区の中央付近では幅約0.8mの場所もある。道路は度重なる改修と修築を繰り返しており、道路跡の覆土中からは多いところでは6面の硬化面が調査された(第17図左)。硬化面の下には波板状凹凸と呼ばれる小ピット群が見られる(第17図右)。小ピットの覆土は硬く締まっており、覆土下位は青灰色化しているものもある。これら小ピットは、径40cm前後、あるいは長軸70cm、短軸40cm、深さ10cmほど(第17図右)で、覆土は直上の土層と同様の土が硬く締まって充塞されているのが一般的である。この小ピット検出面の上面が通路面とは考えられないで、直上の土層の上面が道路面として使用されていたと考えられる。このことから、この小ピット群は道路構築に伴う地業の一部と思われる。このようなピットの設置は硬化面下からだけでなく、枝道(SD010等)からも確認されており、このことからも道路構築に伴う構築方法の一つと思われる。道路跡は、今回調査された台地上でも、全体に緩やかに曲線を描いている(第6図、図版2)。傾斜のきつい斜面部においては、緩やかに蛇行することによって通行を安全にすることが考えられるが、平坦部においても蛇行している状況から、別の理由を考える必要がある。

轍の痕跡をSD011で検出した(第16図、図版4の3)が、対では確認できず、轍間の幅は不明である。他

の道路跡では確認できなかった。台地上における道路跡の調査でも、轍を持つ車が通行できるほどの通路幅は確認できなかった。このことから、轍を検出したSD011は、SD002がそのままの延長された道路跡でなく、他の道路と調査区外で合流している可能性もある。現道下の道路跡（SD001, SD002, SD003）に入る枝道がある。SD004, SD005, SD006, SD007, SD008, SD009, SD010がそれで、SD001, SD002, SD003につながる枝道と思われる。これらの枝道は本道（SD001, SD002, SD003）が改修・修築されるたびに作り直されていたと思われる。

SD001とSD003の覆土から中世輸入銭が出土した。北宋銭で10世紀から11世紀に鋳造されたものである。土器などの遺物の出土は大変少なく、図示できたものは第10図に示した物以外なかった。これらは8世紀から9世紀はじめの猿投窯産の灰釉陶器片である。このように、今回の調査からは道路跡が古代まで通り、中・近世まで使われていたとする積極的な遺物は出土しなかった。しかし、先にふれた財団法人市原市文化財センターによって調査された道路跡とは同一の道路であり、道路跡の覆土中から宝永テフラ層が確認されている。天羽田稻荷山遺跡からは明確な宝永テフラ層は確認されなかったが、黒色度が強く、砂質を示す土層が見られ、この上下に硬化面が検出されていることから、今回の調査で検出した道路跡もこの時期に構築され、使用されていたものと推定される。

山谷遺跡や七人堀込遺跡⁴では、両側に側溝を持つ道路跡が調査されている。天羽田稻荷山遺跡では、浅いU字型をして底面を通路面とした道路跡が調査された。また、調査区からは数度にわたる修繕・修築を受け、重複した道路跡が約130mにわたって調査された。この道路跡の硬化面は0.5m～0.7mあり、耕作土除去後の道路跡確認面での幅は約5mである（第11図SP2等の断面による）。これは、先にふれた山谷遺跡などにみられるような両側に側溝をもつ道路跡と匹敵する幅を持っている。山谷遺跡では道路跡に沿って井戸、掘立柱建物、墓地などがあり、両側に側溝を持つ道路が構築され集落をなしていたと考えられる。天羽田稻荷山遺跡の様に、周辺に集落などのない場所では、単なる浅いU字形をして、中央に通路である硬化面をもつ道路が構築されていたと推定される。

天羽田稻荷山遺跡の西方で枝道が分岐する場所があり、山谷遺跡の近くまでほぼ直線的に続いている。そう考えると、両側に側溝を持つ道路跡は、天羽田稻荷山遺跡の千葉鴨川線を挟んだ西側から始まり、そこから東方は断面U字型の道路であったとも考えられる。一方、天羽田稻荷山遺跡の周辺は荒涼とした原野がつづき、道路も浅いU字型のものであったと思われ、この天羽田稻荷山遺跡の景観こそが当時のこの地域の一般的な道路の様子であったと思われる。

注1 小熊吉蔵「西上総における古街道と国府郡家所在地の関係」史跡名勝天然記念物第7集 1932

小熊吉蔵「鎌倉街道」史跡名勝天然記念物第10集 1933

小熊吉蔵「千葉県に於ける王朝時代の郡家の遺跡」史跡名勝天然記念物第12集 1935

須田 勉「川原井廃寺と古代東海道」南總郷土文化研究会誌第11号 南總郷土文化研究会 1978

桜井淳史「天羽田稻荷山遺跡」市原市文化財センター年報 平成七年度 市原市文化財センター 1998

2 柴田龍司ほか「特集 小櫃川地域の中世遺跡」研究連絡誌第37号 1993

柴田龍司「鎌倉道と市-袖ヶ浦市山谷遺跡の成果から-」研究連絡誌第41号 1994

柴田龍司「西上総の中世道路跡-袖ヶ浦市山谷遺跡の事例を中心に-」中世のみちと物流 山川出版社

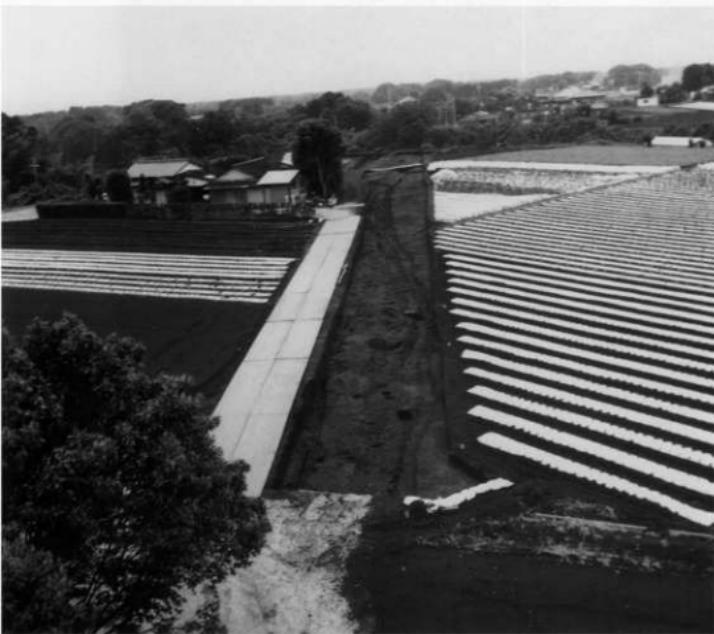
1999

- 3 大谷弘幸「発掘された市原周辺の古代道」古代交通研究創刊号 1992
大谷弘幸「茂原街道に隣接した溝跡について」研究連絡誌第38号 1993
大谷弘幸「西上総地域の古道路」研究連絡誌第41号 1994
- 4 諸墨和義「七人堀込遺跡」君津都市文化財センター 1992

写 真 図 版



遺跡周辺航空写真



1 調査区写真（東から）



2 調査区写真（西から）



1 調査前全景（東から）



2 調査区近景（1）



3 調査区近景（2）



1 調査区近景（3）



2 調査区近景（轍跡検出状況）



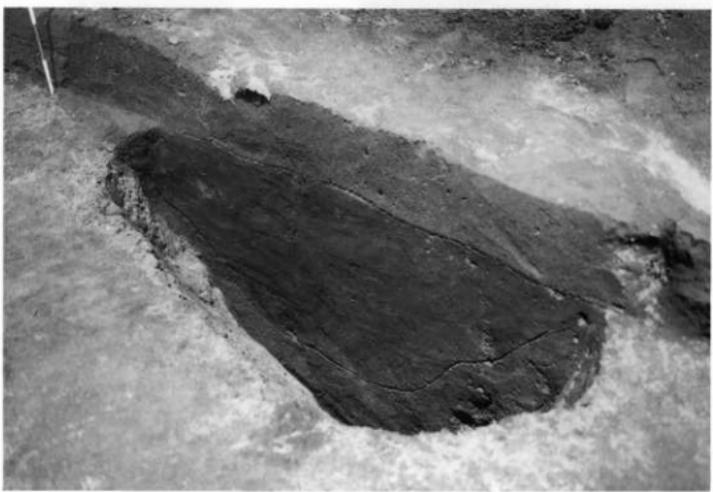
3 調査区土層断面図



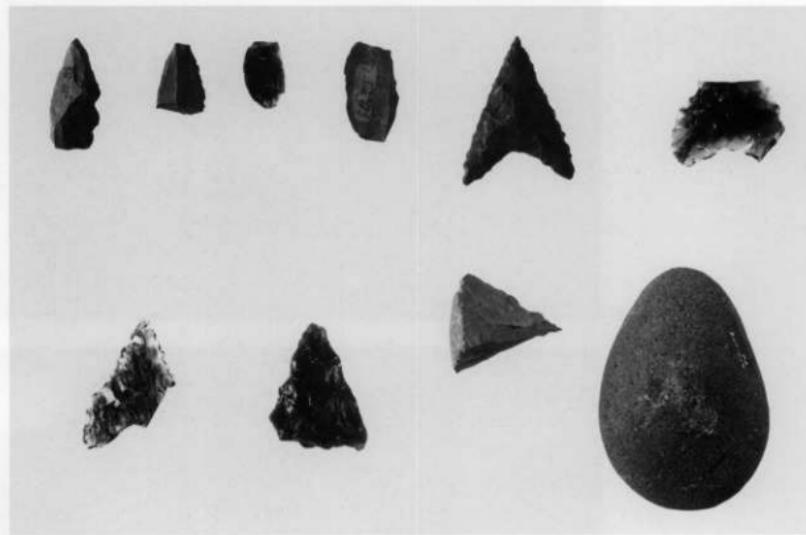
1 波板状凹凸



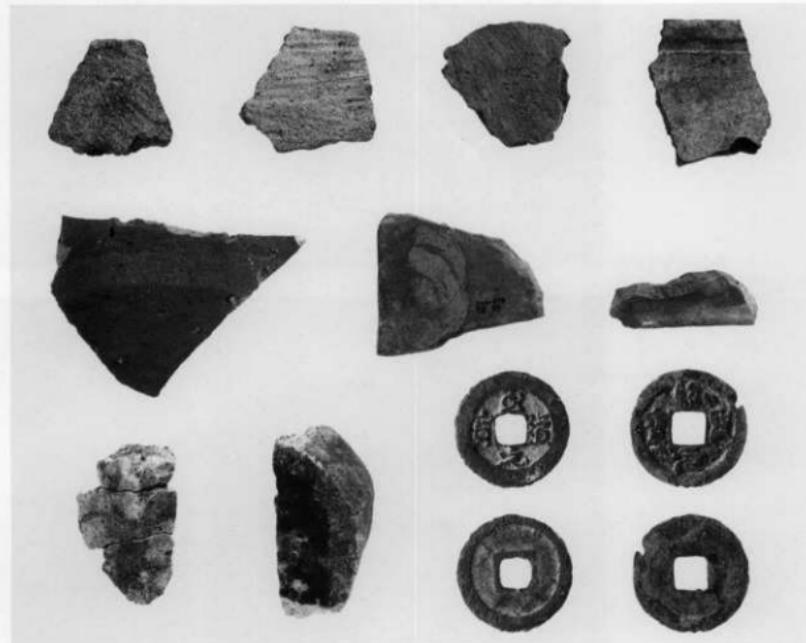
2 西側調査区全景



3 SK001（陥穴）全景



出土遗物（1）



出土遗物（2）

報告書抄録

ふりがな	いちはらしあもうだいなりやまいせき。そでがうらしあもうだいなりやまいせき							
書名	市原市天羽田稻荷山遺跡・袖ヶ浦市天羽田稻荷山遺跡							
副書名	主要地方道千葉鴨川線埋蔵文化財調査報告書							
卷次	4							
シリーズ名	財団法人千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第380集							
編著者名	相京 邦彦							
編集機関	千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 ☎ 043-422-8811							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
天羽田稻荷山	千葉県 市原市天羽田字 稻荷山348-5他	219	078	35度 25分 15秒	140度 02分 54秒	19990401 19990615	1,613m ²	主要地方道 千葉鴨川線 建設に伴う 事前調査
	千葉県 袖ヶ浦市上泉字 西萩原171他	229	025				344m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
天羽田稻荷山	集落	縄文時代	陥穴 炉穴	1基 1基	縄文時代早期土器・石鐵・ 磨石・礫 縄文時代後期土器	通称鎌倉街道の調査		
		中・近世	道路・溝	8条	陶器・古銭・磁石			

千葉県文化財センター調査報告第380集
市原市天羽田稻荷山・袖ヶ浦市天羽田稻荷山遺跡
—主要地方道千葉鴨川線埋蔵文化財調査報告書4—

平成12年3月31日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター
発 行 千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2
印 刷 株式会社 正文社
千葉市中央区都町2-5-5